



発達障害について考える

小林 一郎 (スクールカウンセラー)

退職後、大学院で心理学を学ぶ

37年間の高校教員生活を終え、2年間大学院に学び、臨床心理士資格試験に備えた1年間を経て、63歳にしてスクールカウンセラーとして勤め始めて5年が経った。

大学院の時は毎週のようにレポート発表があり、その準備に追われた。修士論文作成にあたっては、高退教のみなさんのお力添えで、「高校教員の現役時代の職業的充実感と退職後の心理的健康度の相関」というようなテーマで何とか研究を終え、修士論文としてまとめることができた。また、精神科の病棟での実習も印象深く、統合失調症等の患者さんたちとの交流や、精神科医をはじめとした病院スタッフの方々との面識を得たことは、その後スクールカウンセラーとして勤務するうえで、欠かせない貴重な経験となった。

自分自身も発達障害

一方、高校教員として働いた経験はどうだったかと言えば、お恥ずかしいことが多く、私は教員には向いていなかったのかも知れないとさえ思う。いわば「不完全燃焼だった教員生活」をつぐなう意味で、あるいはリベンジする意味で、スクールカウンセラーをめざしたのかも知れない。教員という職業には、ある程度「全面発達」を遂げた人が向いていて、私のような発達の偏りがある人間には向いていない(苦しい部分が多い)ように思う。そういう意味で、私にも「発達障害」があったと思っている

さて、長い教員生活と大学院での学びを経て、スクールカウンセラーになったわけだが、その時点で私は「発達障害」という概念さえ十分に把握していなかった。「自閉症」「アスペルガー」「学習障害」「ADHD(注意欠如多動性障害)」など、言葉では知っていたが、それが具体的に、どのような形で児童生徒の中に表れ、学校生活の中で支障があるのか、ほとんどわかっていなかったと言

っても良い。

学校現場での「学習障害」

学校生活や社会生活で起こるさまざまな「困りごと」の原因や要因を、「発達障害」という言葉で説明するようになったのは比較的最近のことである。「自閉症」という概念からして、まだ数十年の歴史しかない。

また、高校では一応「入試」という関門があって、極度に発達の偏りがある生徒は排除されてきたかも知れない。高校在職時、個々の生徒の問題が「発達障害」というキーワードで語られることは稀だった(多くの場合、「非行」や「怠学」や「問題行動」という言葉が使われた)。そもそも「発達障害」や「特別支援(教育)」というワードを、指導眼目の一つに挙げることすらなかった(学校全体も個々の教員も)。

私が勤務した高校のほとんどは農業、工業、商業などのいわゆる「職業高校(専門高校)」で、私は専門の英語教育よりも日常茶飯に繰り返される喫煙や万引き、暴力沙汰などの「問題行動」の対応に追われていた。そこでは、英語などは最も生徒から忌避される科目で、いかに英語の勉強に関心を持ってもらうかに特化した教材研究をしていたように思う。

あの日々を振り返って、当時の生徒たちを「発達障害」というフィルターを通して見た時に、確かに見えてくるものはあるとは思う。たとえば、ADHDやその二次障害としての「反抗挑戦性障害」など、思い当たるものはある。しかし、それだけではない。時代的要素である。「バブル経済」や「経済大国ニッポン」という言葉に踊らされ、社会全体が浮かれていた(よく言えば「楽観的だった」)時代の空気を、当時の「非行少年」たちは身にまとっていたように思う。「(何やったって) あんじゃねえ(心配ない)・・・」彼らがよく口にしていた言葉である。

「失われた30年」後の今、高校生も中学生も、

当時と比べものにならないくらい「落ち着いて」いる。そういう意味では、今の学校に「荒れ」は少ない。しかし、子どもたちも親も、生活に困難を抱え、疲れ切り、希望を失いかけている。閉塞状況である。

要素は昔からあった

「発達障害」は最近の言葉だが、発達障害的な要素は昔からあった。たとえば、自閉症（今は「自閉症スペクトラム」と呼び、さまざまなレベルの連続体という概念）の中心の特徴は「コミュニケーション能力が阻害されていること」だが、そんな人は昔から大勢いた。ADHDだって学習障害だって、今さら始まったものではない。そういう呼び名が生まれたから注目されるようになったとも言える。

時代の変化が生み出した

では、なぜそういう「障害名」が生まれ注目されるようになったのか。「時代の変化」である。第一次産業が主軸の社会では、どんなに無口だろう

が、「人嫌い」だろうが、その人がきちんと労働し、生産物を生み出している限りは「社会人」として通用した。今は違う。第三次産業が全産業の7割を占める世の中だ。「コミュニケーション能力」がモノを言い、「感情労働（と言いつつ感情を押し殺すことが求められる）」が多くの分野で必須又は当然視されている。こうした状況の中で、学校でも「コミュニケーション能力が一番大事」と指導される。「いつも、誰とでも仲良く」することを求められる学校は息苦しくないだろうか。「独りでいたい時もある」「休み時間に静かに本を読む」ことを異端視するような雰囲気生まれていないだろうか。そもそも「コミュニケーション能力」とは何だろうか。

非行問題が荒れ狂った時代が去り、発達障害が問題の主軸になった。発達障害は時代の変化と社会的（産業的）要請があぶり出したものである。もしかしたら、それは「障害」ではなく、社会のほうにこそ、解決の方向性が問われるべき課題が提起されているのかもしれない。

スクールカウンセラーだより《抜粋》（東吾妻中学校：2021年9月30日号）

みなさんの中には次のような自覚症状を持つ人はいないでしょうか。

- 文字を書くのが苦手（文字がすごく下手、文字を書くのが遅い）
- 文字を読むのが苦手（文字の意味が頭に入ってこない、文字が歪んで見える）
- 特定の教科（たとえば数学）が非常に苦手

実は、何を隠そう、私は文字を書くのが苦手です。まず、字がすごく下手です。自分が書いた文字なのに判読困難、判読不能がしばしば起こります。そして、文字を書くのが遅い。メモをとるのが苦手です。小学生の時、ノートがまともに取れず、書いた文字がぐちゃぐちゃなことに劣等感を感じました。

私のこのような特性は「学習障害」と呼ばれています（軽度のものですが）。「学習障害」には読字、書字など文字に関する困難や、特定の教科の学習に大きな困難を伴う場合などがあります。何が不得意なのかは人によって異なります。人の顔が覚えられない、というのも（極端な場合には）「学習障害」の一種と言えます。

「学習障害」は脳の特定部分が十分に機能していないことに原因があるようです。治療の対象ではありません（病気ではありませんから）。しかし、自分の特性を知って「障害」とうまく付き合う必要があります。ワープロの誕生が私にとって「福音（ふくいん）」となったように、自分の特性をカバーする手段、方法を早く見つけることが大事です。

でも、何よりも大事なものは、本人が自分の特性を理解し、工夫していくことです。「…障害」は恐れるに足らずです。すべての人が、多かれ少なかれ何らかの発達的特性を持っています。得意な分野もあれば、不得意な分野もあります。「障害」ということばが、もしかしたら良くないのかもしれませんが、もっと「多様性」に寛容な雰囲気のことばがあればいいのですが。